『南山神学』43 号（2020 年 3 月）pp. 35-52.

マルタとマリア

― ルカ 10 章 38-42 節の文学的考察 (前半) ―

柊　曉生

はじめに

ルカ 10:38-42 の「マルタとマリア」の記事は、一読しただけでは、マルタがなぜイエスからたしなめられるのかわからないというのが第一印象である。

イエスを迎えたマルタが、接待の種々の奉仕に気が散らされているのに対し、姉妹のマリアはイエスの足元で一心に彼の言葉を聞いている[1]。二人の姉妹の有り様は対照的である。マルタがイエスにマリアのことで何とかしてもらえませんかと言うと、イエスは、マリアはよい役割分担を選んだのだと答えてマルタを諌める。

しかしながら、マリア自身が「聞く」ことを選んだということは、どこにも記されていない。他方、マルタについては「奉仕」「奉仕する」と、名詞と動詞をもって彼女の働きが強調されている。鍵語である二つの動詞、「聞く」と「奉仕する」でもって言いあらわされる対照的な二人の姉妹、「マルタとマリア」のエピソードは、何を私たちに伝えようとしているのか。

本稿はその解明を文学的な観点から、共時的な考察をもって行なうものである。そのため、まず第一に 10:38-42 のルカ福音書においての文脈的位置づけを考察し、次にこのエピソードの文学的考察を、導入文、叙述文、会話文と順に書かれているのに従って、マルタとマリアがいかに対比的に記述されているのかを見て行きたい。

---

1 マルタの姉妹マリアは、ルカ 10:39, 42 のギリシア語本文では“Μαριάμ”「マリアム」であるが一但し、両者ともに或る写本では“Μαρια”一、本稿では一般にならい、「マリア」と表記している。アーロンとモーセの姉妹の名前「ミルヤム」（出 15:20 等）のヘブライ語表記מִרְיָם（miryām）は、七十人訳ギリシア語で Μαριαμ と音写されている。マルコは Μαρία の表記のみであるが、その他の福音書では Μαριάμ と Μαρία が混在している。

1.「マルタとマリア」(ルカ 10:38-42) の文脈的位置

1.1. エルサレムへの途上の出来事

「マルタとマリア」について語るためには、まずイエスのエルサレムへの出立の話から始めなければならない。なぜなら「マルタとマリア」のエピソードは、「さて、彼らが行くと、彼はある村に入った」(10:38) という導入の言葉で始まり、ルカ福音書全体の中で、9 章 51 節から 19 章 44 節まで続く、イエスのエルサレへの途上での出来事として位置づけられているからである[2]。

9:51「彼はエルサレムへ向かって行こうと、顔を確(しか)と据えた」

19:41「彼は町に近づいた時、　～45. そして彼は神殿に入り」

1.2.「エルサレムへの出立」(9:51-56) と「マルタとマリア」(10:38-42)

「エルサレムへの出立」の記事(A)と、「マルタとマリア」の記事(B)は、多くの点で対応関係がある。以下はその主な箇所である。

① 村に入る・村に入る
　A　9:52　彼らは～サマリア人の村に入った。56. そして別の村に入った。
　B 10:38　さて彼らが行くと、　　　　彼はある村に入った。

② 兄弟二人・姉妹二人
　A　9:54　弟子のヤコブとヨハネ　［ゼベダイの二人の息子]。
　B 10:38　マルタという名の女性～39. ～マリアと呼ばれる姉妹。

③ 主よ・主よ
　A　9:54　主よ、お望みなら、～。
　B 10:40　主よ、私の姉妹は、～。

④ 叱責二人・諌言一人[3]
　A　9:55　そこで、　　彼は振り向いて、彼らを叱った。
　B 10:41　あなたは多くのことに思い煩い、取り乱している。

⑤ 拒否・歓迎
　A　9:53　しかし、サマリア人は、彼を受け入れなかった。　(δέχομαι)
　B 10:38　マルタという名の、ある女性が彼を迎え入れた。(ὑποδέχομαι)

以上の諸点から、「マルタとマリア」(B) の記事と、「エルサレムへの出立」(A) の記事との間には、明白な関連性があると見られ、両者はともにルカ固有

---

[2] ルカはイエスがエルサレムに入ったということを明白には書いていない。19:28 で「彼はこれらのことを話し、先に立ってエルサレムに上って行った」と記した後、19:41 で「彼は町に近づいた時、そこを見て泣いた」と述べ、19:45 で「そして彼は神殿に入り、商売をしている者たちを追い出し始めた」と書いているので、「神殿に入った」をエルサレムに入った理解するのが妥当であろう。

[3] マルタには「叱る」という動詞は使われていない。イエスの言葉全体から、マルタを諌める、咎める語調があるということである。“mild rebuke”R. Collins, *Martha (person)* (ABD.vol.Ⅳ.) p.574. “gently chides” Joseph A.Fitzmyer,*The Gospel according to Luke 10-24.* (Anchor Yale Bible. 28A. New York: Doubleday.1985).p.895.

の記事でもあるので、この二つは、最終的な編集段階で、9 章と 14 章の現在の箇所に配置されたものと考えられる。

ルカは、イエスのエルサレムへの道をサマリアから、それも通って行くのを拒まれるサマリアから始めるという特異な書き方をする。そこで別の村からエルサレムに向かって行くわけであるが、単に「別の村」「ある村」と記すだけで具体的な名前は記していない[4]。エルサレムに近いエリコに近づくまで、実際の地名が出て来るのは、「サマリアとガリラヤの間」（17:11）であるが、「間」（μέσος）というのもこれまた漠然とした言い方である。

「マルタとマリア」のエピソードの直前には、「よきサマリア人」の譬え話があるが、ここでは人としてのサマリア人が言われているのであって、地域としてのサマリアではない[5]。ただ、この譬え話は、ある人がエルサレムからエリコに下る途中で盗賊に襲われるという設定である。イエスがエルサレムへ上って行く途中、サマリアとガリラヤの間を通り抜けたと記す 17:11 とは、場所は異なるが、エルサレムへ上ると下るで方向がちょうど反対になっている[6]。

10:30 下る：エルサレムから下る＝サマリア人
17:11 上る：エルサレムへ行く　＝サマリアとガリラヤの間を通る

ルカ福音書全体の中で、サマリア或いはサマリア人は、すべてイエスのエルサレムに上る道程（9:51-19:44）の中で言及されている。

9:51 彼はエルサレムへ向かって～　52. 彼らはサマリア人の村に入った。
10:33 エルサレムからエリコに下る途中、～サマリア人が彼のそばに来た。
17:11 エルサレムへと行く時、彼はサマリアとガリラヤの間を通って行った。
17:16 彼の足元にひれ伏して感謝した。この人はサマリア人であった。

「よきサマリア人」の譬え話は、イエス一行がサマリア人の村で歓迎されず、そこを通ることをあきらめて、「別の村に行った/πορεύομαι」（9:56）というその行程の最後に置かれている[7]。

---

[4] 「別の村」9:56. 「ある村」10:38. 「町々と村々」13:22. 「ある村」17:12.

[5] サマリア/～人/～女の表記：Σαμάρεια「サマリア」ルカ 17:11. ヨハ 4:4, 5, 7. 使徒 1:8. 8:1, 5, 8:9, 14. 9:31. 15:3. Σαμαρίτης「サマリア人」ルカ 9:52. 10:33. 17:16. マタ 10:5. ヨハ 4:9, 39, 40. 8:48. 使徒 8:25. Σαμαρῖτις「サマリア女」ヨハ 4:9, 9.

[6] サマリア→エルサレム＝「別の村」5:17. 8:1. 9:6, 12, 52, 56.
エルサレム→エリコ　＝「ある村」10:38. 13:22. 17:12. 19:30. 24:13, 28.

[7] 10:1-12 では 72 人が任命され、イエスが行こうとするすべての町と地方へ彼らを派遣することが述べられ、これを受けて 10:17-20 では彼らの帰還が記されている。これらの記事もルカ固有の記事であって、ここでは動詞「行く」（ἔρχομαι）が使われており、9:51-56 の単元とはまた別の時に記されたものであると思われる。12 人を選んで使徒とする話は、ガリラヤでのこととして 6:12-16 で書かれているが、72 人の任命と派遣は、エルサレムへの途上の出来事として記されている。12 人はガリラヤで、72 人はエルサレムへの途上でと発展的に増大して進んで行くよう述べられている。そして「マルタとマリア」のエピソードは、この 72 人の任命と派遣の記事の後に出て来るが、この記事の中には、後述する、「二人ずつ」（10:1）「家に入る」（10:5）「食べる、飲む」（10:7）「食べる」（10:8）

動詞「行く」（πορεύομαι）は、サマリアを通ってエルサレムに向かおうとするイエス一行の話（9:51-56）の中で4回（51, 52, 53, 56）繰り返し強調して用いられており、最後の56節の「彼らは別の村に行った」を受けて57節は、「彼らが道を行くと」と、新しく始まる。そしてこの動詞が次に出て来るのは「よきサマリア人」の譬え話の最後においてである。そこでは「行って、あなたも同じようにしなさい」(10:37)と言われており、その次に新しく始まる「マルタとマリア」のエピソードの最初は、それを受けてまた新しく「彼らが行くと、彼はある村に入られた」(10:38)とつながってゆく。

すなわち、「マルタとマリア」の記事は、イエスの「エルサレムへの出立」の記事を引き受けて、新しく始まる区切りの最初の出来事として設定されているということである[8]。

それは動詞「入る」(εἰσέρχομαι)の用法からも窺い知ることが出来る。「彼らは行ってサマリアの村に入った」(9:52) が歓迎されず、別の村に行くのであるが、次に「ある村に入る」と言われるのは一弟子たちではなくイエスであるが、一、「マルタとマリア」のエピソードの導入文に於いてであり、そこでイエスが歓迎されるということからも明らかである[9]。

9:52	［遣わす］	彼らは行ってサマリアの村に入った。
9:51-56	終り	彼らは別の村に行った。
9:57-62	始め	彼らが道を行くと～」
10:1	［遣わす］	家に入る(5)、町に入る(8)、町(10)に入る。
10:25-37	終り	行って、あなたも同じようにしなさい。
10:38-42	始め	彼らが行くと、彼はある村に入った。

2. 「マルタとマリア」（10:38-42）の文学的構成

「マルタとマリア」のエピソードは、以下のように構成されている。

1. 導入文（10:38a）　　「彼らとイエス」　　男性二組

「受け入れられる」(10:8)などのことが言われている。12人から72 人へと人数が増えて進んで行くという記述は、「その頃、弟子たちの数が増えてゆき～7. こうして、神の言葉は広まり、弟子の数は～著しく増えてゆき」（使6:1-7）という初代教会の状況によく似ている。「マルタとマリア」の記事と使徒6:1-7の「七人の選出」の記事は、前者が全5節、後者が全7節で書かれているが、短い単元である両者には7語の同語（奉仕、奉仕する、言葉、必要、放る、選ぶ、兄弟/姉妹）が使われている。「マルタとマリア」のエピソードを通時的に考察するには、このことを勘案する必要がある。

[8] 但し、エルサレムへの道で、最初に入るのはサマリア人の村(9:52)と特定されているが、それ以降、エリコの前のサマリアとガリラヤの間までは不特定の「ある町や村」である。「別の村に行く」(9:56)、[すべての町や所に遣わす(10:1)]「ある村に入る」(10:38)「町々や村々を通り抜ける」(13:22)「サマリアとガリラヤの間を通り過ぎ、12. ある村に入る」(17:11-12)

[9] その間には、イエスの言葉ではあるが、家(10:5) ,町(10:8), 町(10:10)に入るということが言われている。

2. 叙述文 （10:38b-40a） 「マルタとマリア」 女性二人
3. 会話文 （10:40b-42） 「マルタとイエス」 女男二人

2.1. 導入文(10:38a)「彼らとイエス」男性二組

「さて、彼らが行くと、彼はある村に入った」

「マルタとマリア」の導入部分で、「彼らが行くと、彼はある村に入った」と記されているが[10]、これはすでに見たように、「エルサレムへの出立」(9:51-56)で、「彼らは行って、サマリア人の村に入った」に対応する。確かに両者ともに、「行く」と「入る」という動詞が並列されている。しかしながら動詞の主語は異なっている。

9:52　彼らは行って(3pl.)、サマリア人の村に入った(3pl.)
10:38　彼らが行くと(inf.)、　彼はある村に入った(3sg.)

「彼らは行って、サマリア人の村に入った」（9:52）の「彼ら」はイエスの使いの者たちであり、「彼らが行くと、彼はある村に入った」（10:38）の「彼ら」はイエスと弟子たちの一行であり、「彼」はイエス個人である。

「ある村に入る」（10:38）のはイエス個人である。それ以後、イエス個人は町々や村々で教えながらエルサレムに向けて旅を続け（13:22）、さらにエルサレムへと進んで行く時、サマリアとガリラヤの間を通り抜け、「ある村に入る」(17:11-12)。「マルタとマリア」の記事の次に、イエスが「ある村に入る」のは、この「10 人の重い皮膚病患者の治癒」（17:11-19）の箇所である[11]。

両者ともに「ある村に入る」と訳されるが、前者は「村・或る」（εἰς κώμην τινά.）、後者は「或る・村」（εἴς τινα κώμην.）とキアスムス形式で結ばれており、両者は切り離して考えることは出来ず、「ある村」はエルサレムへ向かっての道での一里塚とでも言うべき重要な場所であるということがわかる。

9:56　そして、彼らは別の村に行った。
10:38　彼らが行くとき、彼はある村に入った。
17:11　彼はエルサレムへと行くとき、
17:12　　　　　　彼がある村に入ると、

9:56　καὶ　ἐπορεύθησαν　εἰς ἑτέραν κώμην
10:38　Ἐν δὲ τῷ πορεύεσθαι αὐτοὺς αὐτὸς εἰσῆλθεν εἰς κώμην τινά
17:11　Καὶ ἐγένετο ἐν τῷ πορεύεσθαι εἰς Ἰερουσαλὴμ
17:12　καὶ　εἰσερχομένου αὐτοῦ εἴς τινα κώμην

[10] 但し、ヨハ 11:30 では「イエスはまだ村には入って来ず、マルタが出迎えた所にいた」と書かれている。

[11] ここでは、重い皮膚病を癒された一人のサマリア人が感謝して戻って来たのを、イエスが称賛するということが記されている。

しかしながら、イエスが「入る」のは「村に」であって「家に」とは書かれていない[12]。ただ続く文節で、「すると、マルタという名の、ある女性が彼を迎え入れた」とあるので、イエスが迎え入れられたのは「家に」ではないかと考えられる[13]。

「迎え入れる」(ὑποδέχομαι)という動詞は[14]、新約聖書の中で4回用いられているが、そのすべての箇所で「家に」という語は付加されていない。ただ、ザアカイはイエスを迎え入れるが(ルカ 19:6)、その前の5節で、「今日は、あなたの家に泊まることにしている」とあり、また、ヤソンは彼らを迎え入れていた/かくまっていたが(使 17:7)、その前の 5 節で「ヤソンの家を襲い」とある。ラハブは使いの者たちを迎え入れ/かくまい、「別の道から送り出す」(ヤコ 2:25)が、ここでは「家」に関する言及はない。しかし、ヨシ 2:1,3,では二人の斥候が「娼婦の家に入る」(LXX: εἰσήλθοσαν εἰς οἰκίαν γυναικὸς πόρνης)と「家に入る」ことが言われているので、そのことは前提とされているであろう。

「マルタとマリア」の場合には、上記の三例とは異なり、文脈上でも「家」に関する語句は見当たらない。しかし、この三例の用例からしても、マルタが「多くの奉仕」に気が散らされ、マリアが「主の足元で」彼の言葉を聞くというのは、家の中でのことと考えてよいのではないか[15]。イエスがシモンの「家に入り」、彼の姑が熱で苦しんでいるのを癒されると、彼女がすぐに起き上がって彼らに「奉仕する」(4:38,39.10:40)ことや、イエスがファリサイ派の人の「家に入り」、食卓に着くと、罪深い女が「イエスの足元で」泣きながらその涙で

---

[12]「家に・入る」マタ 10:12.12:29.マコ 6:10.7:24.13:15.ルカ 4:38.7:36,44.10:5、使 9:17.18:7.

「町に・入る」マタ 10:5,11.マコ 1:45.ルカ 10:8,10.

「入る・町に」マタ 27:53 ルカ 22:10 使 9:6.14:20.黙 22:14.

「入る・村に」ルカ 9:52.10:38.17:12.

「村に・入る」マタ 10:11.マコ 8:26.

[13] Nestle-Aland の *NovumTestamentum Graece*[28] の当該箇所の欄外注では、「家に」が書かれている写本が挙げられているが、本文においては「家に」はない。B.M.Metzger, *A Textual Commentary on the Greek Testament*[2] も「家に」については言及していない。ただヴルガタ訳をはじめ、多くの翻訳が「家に」を付け加えて訳している。「家に」(新共同訳)"into her home"(NRSV) "dans sa maison" (TOB)。但し、"die nahm ihn auf."(LUT)、「ある女が彼を迎えた」(岩波版)等は「家に」を付け加えず直訳している。

ヨハ 11:20 では「マルタは、イエスが来られると聞いて、出迎えに行ったが、マリアは家で(ἐν τῷ οἴκῳ)座っていた」と、出迎える場所と家とを区別している。また 11:30 では「イエスはまだ村には来ないで、マルタが出迎えた所にいた」とあり、マルタが出迎えた所と、村とが異なった場所として位置づけられている。

[14] ὑποδέχομαι(全4回)の同義語として、δέχομαι(全56回)ὑπαντάω(全10 回)、ἀποδέχομαι(全7回ルカ文書)等がある。ヨハ 11:20,30 は ὑπαντάω を用いている。

[15]「マリアは家で(ἐν τῷ οἴκῳ)座っていた」(ヨハ 11:20)

イエスの足をぬらし始める（7:36-47）などということからも、イエスがマルタとマリアの「家に入って」「迎え入れられた」と解釈することが妥当であろう。

「マルタとマリア」の 10:38 では、イエスが「村に入る」こと、マルタが彼を「迎え入れる」ことが言われているが、これまたルカ固有の記事である「72 人の派遣」(10:1-12)の箇所では[16]、イエスは 72 人をそれぞれ 2 人ずつ「すべての町や地方に」（10:1）派遣し、派遣される者たちに「家に入る」（10:5)、「町に入る」(10:8)際の心構えを述べている。

家に入っては、「出されるものを食べたり飲んだりしなさい」(10:7)、町に入っては、「迎えられたら」（δέχομαι)、「出されるものを食べ、」(10:8)と言われている[17]。町に入っても、家に入っても、食べることが述べられている。すなわち、迎え入れられることと共に、食事が出されるもてなしを受けるということが前提として言われている。

「72 人の派遣」では、町や地方の家に派遣される者たち、受け入れられる側の者たち者の有り方が説かれているが、この記事の後に記されている「マルタとマリア」のエピソードでは、迎え入れる側の者たちの有り方が問題となっている。両者の主客は相反するが、どちらも接待のもてなしに関してのことである。

ただ 10:1 では、「二人ずつ」派遣すると言われているが、これは男性たちであって[18]、女性たちではない。マルタとマリアの二人の女性は、家で迎え入れる側の者たちの立場であり、そこでの役割は 8:1-3 で言われているイエスと 12 人に「奉仕する(διακονέω)女性たち[19]、或いはシモンの家で、熱が去った姑の「奉仕する」（διακονέω)姿と重なり合う[20]。ただ「マルタとマリア」の記事で、一点特異なことは、「奉仕する」（10:40. διακονέω)以上に大事なこととされている「聞く」（10:39. ἀκούω)ということである。

2. 叙述文「マルタとマリア」（女性二人）

「すると、マルタという名の或る女性が彼を迎え入れた。彼女にはマリアと呼ばれる姉妹がいたが、[その]彼女は主の足元のそばに座って、彼の言葉を聞

[16] 9:51-19:44 の「エルサレムへの道程」の箇所では、ルカ固有の記事が多い。*Nouveau Testament,* TOB(Paris 1977)(i)p.227.参照。これはイエスの三回の「受難・死・復活の予告」の第 2 回目から第 3 回目の予告の間、9:43b-18:31-34 にほぼ重なり合う。マタイ、マルコに比較してルカが第 2 回目から第 3 回目の予告の間が長いのは、モーセ五書のシナイ山の記事が出 19:1 から民 10:10 と長いのに比較することが出来る。両者ともに大事な箇所に伝えようとする大事なことを編集の最終段階に於いてそこに盛り込んだと考えられるからである。

[17] 10:10「しかし、町に入っても迎えられなければ、広場に出てこう言いなさい～」

[18]「二人ずつ」δύο. 男性複数対格(10:1)

[19] 但し、彼女たちはイエス一行に追随して行くが、マルタとマリアの場合は家に於いてである。

[20] この二つもルカ固有の記事である。

いていた。しかしマルタは、多くの奉仕で気が散らされていた」(38b-40a)

2.1. 叙述の形式

叙述文はマルタとマリア、二人の姉妹についての記述であり、両者の緊密な関係がキアスムス(交差法)形式で表現されている[21]。

a　マルタ（38b）　マルタという名の或る女性が彼を迎え入れた。
b　マリア（39a）　彼女にはマリアと呼ばれる姉妹がいた。
b’ マリア（39b）　彼女は主の足元のそばに座って、その言葉を聞いていた。
a’ マルタ（40a）　マルタは多くの奉仕のために、気が散らされていた。

最初はマルタの記述で始まり(a)、続いてマリアについて書かれ(b)、そのあとまたマリアの記述が続き(b’)、最後にまたマルタに戻る(a’)。すなわち、a-b-b’-a’のキアスムス(交差法)形式で記され[22]、二人は、姉妹等しく同じ17語で書かれている[23]。

2.1.1. 二人の対比 ―並行法―

① 「女性」マルタ・「姉妹」マリア　―イエスとマルタ・マルタとマリア―

「彼がある村に入った」(10:38)の「彼」に続いて出て来る最初の人物はマルタであり、そこで彼女は、「或る女性が～彼を迎え入れた」(38)と、男性であるイエスとの関係で「女性」(γυνὴ)と言われている[24]。それに対し、続く次節でのマリアについては、「彼女にはマリアと呼ばれる姉妹がいた」と、マルタとの関係で「姉妹」(ἀδελφὴ)と述べられている[25]。

---

21 二人の兄弟の話としては、「カインとアベル」（創4:1-16）の物語に於いて、カイン・カナー・アベル・アベル・カイン・カイン・アベル・アベルと連鎖したキアスムス形式での記述がある。

22 但し、レアとラケルの姉妹の場合（創29:16）、その順序は、(a)-(b)-(a’)-(b’)である。「姉の名はレア、妹の名はラケル。レアは～、ラケル～」

23 但しマリアの場合には、或る写本によれば39bに[-ἣ](関係代名詞）があり、その場合は18語となる。

24 ルカ福音書で「女性」(γυνὴ)は、第一コリント書と同じく41回用いられており、四福音記者の中では最も頻度が高い。マタ29回.ヨハ22回.使19回.黙19回.マコ17回。

25「兄弟」の語はルカで19回用いられているが、「姉妹」の語は3回(10:38,40.14:26)だけであり、名前を持つ姉妹が登場するのはここだけである。「放蕩息子の譬え」では、「兄弟」が名前なしで出て来るが(15:27,32)、兄がイエスからたしなめられるように、「マルタとマリア」でも、姉であろうマルタがたしなめられ、両者には類似する要素がある。

しかしながら、ここではどちらが姉でどちらが妹かは記されていない[26]。ただ、「彼」の後、マルタが先に登場し、その次にマリアが出て来るということ[27]、また、マルタが「彼を迎え入れた」とあることなどから[28]、一般的にはマルタが姉であると考えられる。

②「名前」マルタ・「呼ぶ」マリア　　　　　　ー名詞・動詞ー

マルタには、「マルタという名前」、マリアには「マリアと呼ばれる」と、一方には名詞「名前」(ὄνομα)、他方には動詞「呼ぶ」(καλέω. 受動形)と異なった品詞で二人が並列されている[29]。ルカはこのようにして、マルタとマリアの姉妹の二人を対比的に描いている。

③「聞く」マリア・「気が散らされる」マルタ　ー能動形・受動形ー

39b ［その］彼女は～、彼の言葉を聞いていた。

40a しかしマルタは、多くの奉仕で気が散らされていた。

マルタがイエスを迎え入れた後、姉妹の二人について、先にマリア、次にマルタの有り様が述べられる。マリアは「主の足元のそばに座って彼の言葉を聞いていた」と、「主」と結びつけられているが[30]、「マルタは多くの奉仕のために、気が散らされていた」と、彼女自身の心の有り様が問題となっている。一方は「聞いていた」(能動形・半過去)、他方は「気が散らされていた」(受動形・半過去)と、マリアの場合には能動形でイエスとの関係、マルタの場合には受動形で彼女自身との関係をあらわしているが、どちらも同じ半過去形で両者の有り様が対比されている。

⑴「彼の言葉を聞く」マリア

---

26 レアとラケルの場合のように、「より大きい」μείζων(LXX) ＝姉、「より若い」νεωτέρα(LXX)＝妹と言った場合（創 29:16 等）、或いはロトの二人の娘のように、「より年取った πρεσβυτέρα(LXX)＝姉、「より若い」νεωτέρα(LXX)＝妹と言った場合（創 19:31 等) には、明白に「姉」「妹」とわかるが、聖書では多くの場合、「兄弟」(ἀδελφός)「姉妹」（ἀδελφή）とのみ記され、文脈から兄か弟か、姉か妹かを推察しなければならないことが多い。

27 ヨハ 11:5, 19, 20, 28 も同様である。しかし、11:1 では「マリアとその姉妹マルタ」、11:39 では「ラザロの姉妹マルタ」とあり、マルタがマリアの姉妹、ラザロの姉妹とされている。

28 ヨハ 11:20, 30 参照。

29 ルカで「名前」ὄνομα(34 回)と「呼ぶ」καλέω(43 回)が、このように一対で使われているのはこの姉妹だけにであって、このような例は他にはない。男性で「名前」(τὸ ὄνομα) と「呼ぶ」(καλέω) を一対として使うのは、ヨハネやイエスの命名 (1:13, 31. 1:59, 61. 2:21) とザアカイの場合 (19:3) がある。ザカリア(夫)とエリザベト(妻)の場合(1:5)、ヨセフ(許婚)とマリア(乙女)の場合(1:26)、両者共に「名前」が使われている。シモンとその兄弟アンドレの場合、シモンにペトロと名前をつけたと動詞「名前をつける」(ὀνομάζω)が用いられてい(6:14)。

30 マルタ同様、最初にイエスと結びつけて「主の足元」と言われているが、マルタの場合は「彼を迎え入れた」と代名詞「彼」でつながれているという違いがある。

マルタと異なり、マリアはイエスの足元のそばで、彼の言葉を聞いていた[31]。マルタがイエスを迎えて、あれやこれや、接待の作業をするという動的な振る舞いに対し、マリアの方は黙って座り、彼の話す言葉を聞くという静的な態度が対称的である。

ルカでの「言葉を聞く」の意味合いについて調べてみると[32]、「言葉を聞く」は、それに続く「行なう」「守る」等の動詞と一緒になって、二動詞が組み合わされ、セットとして使われる場合が多いのが特徴的である。「言葉を聞く」と単独に言われているのは、ゲネサレト湖畔での群衆(5:1)と、マルタの姉妹マリアの場合だけである。「言葉を聞く」というのは、ルカ福音書では、基本的に「行なう」「守る」という行為がともなってはじめてその意味が成立するものと考えられる[33]。

「言葉を聞く」＋「行なう」「守る」に関連する人々はどういう人たちかというと、この用例が出て来るルカ福音書前半の三カ所(5:1.6:47.8:11-15)では主に男性たち、後半の三カ所(8:19-21.11:27-28.10:38-42)では主に女性たちである。

男性たちとは、「ゲネサレト湖畔の群衆」(5:1)ー多くは男性たちであったと考えられるー、「家を建てる人の譬え」(6:47)と、「種を蒔く人の譬え」(8:13、15) での男性たちである。

女性たちとは、「私の母、私の兄弟とは～」(8:19-21)ー兄弟もいるがーでの「母」、「むしろ幸いなのは～」(11:27-28) での「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房」、それに「マルタとマリア」(10:38-42)での姉妹マリアである。

女性たちの中で、具体的な人物として、単に「言葉を聞く」と名前をあげて言われているのはマリアだけであり、その他では、「私の母、私の兄弟とは、神の言葉を聞いて行なう人々のことである」(8:21)、「むしろ幸いなのは神の言葉を聞いて守る人々のことである」(11:28)などと、実践的な「行なう」「守る」という行為と結びつけられていて、マリアの場合とは少し異なる。

「言葉を聞く」用例のすべての箇所で、その言葉は「神の言葉」(5:1.8:11,21.11:28)「私/イエスの言葉」(6:47)「彼/イエスの言葉」(10:39)であると説明されているが、中でも8:21と11:2の女性たちの両箇所では、「神の言葉」と「聞く」＋「行なう」或いは「守る」が直接に結びつけられ、強調

---

[31] 「言葉を聞く」ルカ 5:1.8:15.11:28.マタ 13:19.15:12.マコ 4:16,20.ヨハ 8:43.使 4:4.10:44.13:7,44.19:10.エフェ 1:13.

[32] 使言行録では、単に「言葉を聞く」(10:44)」が 1 回、「(総督が～) 神の～」が 1 回(13:7)、「(町中の人が/すべての人が～) 主の～」が 2 回(13:44.19:10)、「(異邦人が～) 福音の～」が 1 回(15:7)である。

[33] 「行なう」「守る」などが否定的に述べられるのは、「家を建てる人の譬え」(6:47)、「種を蒔く人の譬え」(8:11-15)の二つの場合だけであり、その他の具体的な事例で否定的に言われることはない。

されている。二つの動詞、「聞く」と「行なう」或いは「守る」は、両者ともに分詞・現在・複数形で書かれており、その近親性が認められる。

8:21「私の母や兄弟たちとは、神の言葉を聞き、それを行う人々である」
11:28「むしろ幸いなのは、　　神の言葉を聞き、それを守る人々である」
8:21　οὗτοί εἰσιν οἱ τὸν λόγον τοῦ θεοῦ <u>ἀκούοντες</u> <u>καὶ</u> <u>ποιοῦντες</u>.
11:28　μακάριοι οἱ <u>ἀκούοντες</u> τὸν λόγον τοῦ θεοῦ <u>καὶ</u> <u>φυλάσσοντες</u>.

ではなぜマリアの場合には「聞く」だけで、実践的な行為を言う動詞である「行なう」「守る」が付け加えられていないのであろうか。

それはマルタの場合に使われている「行なう」をあらわす動詞、「奉仕する」と関係があるからではないか。すなわち、「マルタとマリア」のエピソードでは、「言葉を聞く」ことは「奉仕する」＝「行なう」ことと合わせて一つと考えることが肝要ではないかということである。「言葉を聞く」＋「行なう」「守る」というのがルカの基本的なメッセージであるとすれば、マルタとマリアの姉妹は、二人合わせてそれを実行しているのではないか。いわば、「聞いて、行なう」或いは「聞いて、守る」というセットとなっている二動詞が分割され、二人の姉妹それぞれに割り当てられていると考えられるのである。それは、10:42 でイエスが、「マリアは良い部分/役割/分担」(μερίς)を選んだと言うことからも考えられることである。

ここに他の「言葉を聞く」箇所にはない、「マルタとマリア」の特殊性がある。すなわち、姉妹の二人に、「聞く」と「行なう」がそれぞれの分、役割(μερίς)として分担させられており、二人の「奉仕する」と「聞く」を合わせて、「言葉を聞いて行う」を実践することになると考えられるのである[34]。

39-40 節の文脈で「聞く」(動詞)と「奉仕」(名詞)は、動詞と名詞で品詞的には対応せず、対応するのは、両者ともに 3 人称女性単数形の「聞く」と「気が散らされる」である。実質的な意味合いにおいて「聞く」に対応する動詞は、40 節後半の「奉仕する」であるが、ここで強調されているのは「奉仕」のことではなく、彼女の心の有り様だということである。

⑵「多くの奉仕に気が散らされる」マルタ

(ⅰ)「多くの奉仕」

マルタがイエスを迎え入れた後、彼女が行なっていたのはイエスをもてなすこと、接待のことで、それをルカは「奉仕」(διακονία)という単語であらわしている[35]。この「奉仕」という名詞は、福音書では、唯一ルカのここのみに用いられており、次節のマルタの言葉の中で使われている動詞「奉仕する」(διακονέω)と同根の語である。

---

[34] 「言葉を聞く」と「奉仕」が、二つで一つということを、マルタとマリアの二人の人物でもってエピソード風に物語られているのは、初代教会での「言葉」と「奉仕」の軋轢問題(使 6:1-7)が背後にあったと推測される。

[35] 『聖書語句大辞典』での διακονία の訳語は、「援助、ご用、接待、務、任務、配給、働き、奉仕」(教文館 1959 年)索引 12 頁。

七十人訳での διακονία の用例は 2 回と少なく、「食器」（1 マカ 11:58）[36]、「侍従」（エス 6:3）[37]の意味で使われているだけである。

新約聖書では 34 回使われているが、福音書ではルカの 1 回の他は、使徒 8 回、ロマ 4 回、2 コリ 12 回、その他 7 回という次第であり、これは、この語が初代教会との関連で多く用いられていたものと考えられる。

「マルタとマリア」のエピソードの背景には、「神の言葉（λόγος）を放っておいて、食卓の奉仕をする（διακονέω）のはよくない」（使 6:2）と言われている「七人の選出」（使 6:1-6）の出来事があると想定されるが、そこでは、「日々の分配/奉仕 διακονία」（使 6:1）「祈りと言葉の/διακονία」（使 6:4）と、2 回 διακονία が使われている。

「日々の分配/奉仕 διακονία」というのは、「誰かが必要（χρεία）[38]とすることに応じて～分け合った（διαμερίζω）/与えた（διαδίδωμι）」（使 2:45. 4:35）と書かれているように、初代教会において、皆で持ち寄ったお金、或いは食料などで助け合ったということである。こうした奉仕はいまだそれほど組織的ではない活動であったと思われ、そこから問題が起こり、その解決のために、七人を選んだ（ἐκλέγω）[39]というわけである。これと同じ「分配/奉仕 διακονία」が、ルカ福音書の「マルタとマリア」の箇所（10:40）で使われているというのは、両箇所の文脈からしても、何らかの関連性があると考えられる。

人の集まりは大きくなるにつれ、組織化されて行くが、「奉仕」ということも、教会共同体において、一つの体を形づくる一つの部分としての役割を果たすようになってくる。ルカ福音書でも、弟子たちが 12 人から 72 人に増えていった後の「マルタとマリア」の話の中で、「奉仕」について言及されている。共同体の構成員は、それぞれが与えられた賜物によって、預言、信仰、奉仕に専念するよう勧められ（ロマ 12:4-8）、「こうして、聖なる者たちは奉仕の働きに（εἰς ἔργον διακονίας）適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆく」（エフェ 4:11-12）。

またパウロは、賜物、務め（διακονία）、働きを並列し、「務め/奉仕にはいろいろ（διαιρέσεις διακονιῶν）ありますが、仕えるのは同じ主です」（1 コリ 12:5）と、奉仕には種々あることを示唆する。こうした意味で、「奉仕」は共同体の「奉仕の務め」「任務」の意味を持つようになる[40]。

使徒言行録の始めに、ユダの代わりとなる「マティアの選出」（1:15-26）の記事があるが[41]、それはユダが「受けていた任務/奉仕（διακονία）」（1:17）、「そ

---

[36]「彼はヨナタンに黄金の器と食器を（χρυσώματα καὶ διακονίαν）贈り」或いは、別訳"a table service"（NRSV）."un service de table"（TOB）.

[37]「王の侍従たちは言った」（οἱ διάκονοι τοῦ βασιλέως）

[38] ルカ 10:42「必要」（χρεία）

[39] ルカ 10:42「選ぶ」（ἐκλέγω）

[40] ロマ 11:13. 1 テモ 1:12. 2 テモ 4:5,11 等参照。

[41] 使 6:1-7 の「七人の選出」の記事に似る話である。

の任務/奉仕(διακονία)の地位」(1:25)を[42]、ヨセフとマティアの二人のうち、どちらを主が選ばれる(ἐκλέγω)[43]か、くじを引くとマティアに当たり、彼が 11 人の使徒の仲間に加えられる(1:25)。二人のうちの一人が選ばれるというのは、マルタとマリアの二人の中で、イエスが、マリアは「よい分/分担/役割/割当を選んだ」(μερίς. 10:42)という話に酷似する。

「マルタとマリア」のエピソードで、マルタが「奉仕」、マリアが「言葉」に関わるというのは、おそらくこうした初代教会の役割分担が背景にあったと考えられる。

(ⅱ)「気が散らされる」(περισπάω)

この動詞は、新約聖書中ルカのここだけに出て来る単語で[44]、περι(～について[原意「周囲に」])＋σπάω([引き]抜く)から成る複合動詞で、「周りから引き離す、剥ぎ取る、[脇へ]逸らす」などの意味をあらわし、「気が散らされる、ひどく忙しい、忙殺される」(受動形)等を言う。

この動詞は七十人訳聖書では 6 回使われているが[45]、ルカ 10:40 での用法に近いのは、「すべてのことに気が散らされていて」というシラ 41:2 の箇所である[46]。

シラ 41:2　「全てのことに、気が散らされていて」
ルカ 10:40　「多くの奉仕に、気が散らされていた」
シラ 41:2　　　καὶ περισπωμένῳ περὶ πάντων
ルカ 10:40　δὲ Μάρθα περιεσπᾶτο　περὶ πολλὴν διακονίαν

マリアがイエスの話を「聞いていた」というのには、聞くこと一点に心が集中されていたということが考えられるが、マルタが多くの奉仕に「気が散らされていた」のは、「奉仕」(単数)には、「多くの(やるべき奉仕)」(複数)があり、彼女の心に雑念が生じ、思い悩み、心が千々に乱されていたからであろう。問題は奉仕の仕事ではなく、彼女の心の有り様であったのである。

マリア「彼の言葉を聞いていた」
マルタ「多くの奉仕に気が散らされていた」

---

42 使 1:17,25.

43 ルカ 10:42.

44「マルタとマリア」の単元では他に、「そばに座る」παρακαθέζομαι (10:39)「気が散らされる」περισπάω (10:40)「心が掻き乱される」θορυβάζω (10:41) の 3 動詞が hapax legomenon(1 回限りの語:孤語)である。

45 サム下 6:6. コヘ 1:13. 3:10. 5:19. シラ 41:2. 2 マカ 5:2. περισπάω はサム下 6:6 ではヘブライ語שמט(šamat)「つまずく、よろめく」の訳語として用いられ、コヘ 1:13(qal). 3:10(qal). 5:19(hif)では、ענה(ănah)「苦しめる、悩ます」の訳語として使われている。

46 1 節には、「心悩まさず/気が散らされることなく」ἀπερίσπαστος という περισπάω「心悩ます/気が散らされる」の対義をあらわす形容詞が使われている。

マリア “ ἀκούω (ipf. act. 3sg) τὸν λόγον(sg) αὐτοῦ (sg)”
マルタ “ περισπάω (ipf.pass.3sg) περὶ πολλὴν(pl) διακονίαν(sg)”

41 節で、マルタはイエスから、「あなたは多くのことに思い煩い、心が掻き乱されている」とたしなめられるが、それは「多くの奉仕」のことに対してではなく、彼女の心の有り様に対してである。イエスが言う「心が掻き乱されている」（θορυβάζω）という動詞は、40 節の「気が散らされている」と同義で、叙述文の 40 節では半過去形、会話文の 41 節では現在形であるが、両者ともに受動形であり、新約聖書中に 1 回だけ使われている特別な動詞である。

以上の二つの動詞、「聞く」と「気が散らされる」の意味するところが、以下の 40 節後半から 42 節までのマルタとイエスの問答に入る契機となる。前半の叙述文で言われていることが、後半の会話文でのマルタとイエスの問答を引き起こすわけである。

④「そばに座る」マリア・「傍らに立つ」マルタ　ー座る・立つー

複合動詞「そばに座る」παρακαθέζομαι の接頭前置詞「そば」παρα も、「傍らに立つ」ἐφίστημι の接頭前置詞「傍らに」ἐπί も、同義語であり、両者ともに或る存在への近さをあらわす。一方、動詞「座る」καθέζομαι と「立つ」ίστημι は、身体動作を着座と起立の静と動の対比であらわしているが、両者ともにアオリスト分詞で記されている。

マリア「側に座る」παρακαθέζομαι (aor.part.) = παρα＋καθέζομαι
マルタ「傍に立つ」 ἐφίστημι (aor.part.) = ἐπί＋ίστημι

⑴「そばに座る」（παρακαθέζομαι）マリア

新約聖書で使われる動詞「座る」には、κάθημαι（91 回）、καθίζω（46 回）などがあり[47]、これらが一般的であるが、当該箇所での παρακαθέζομαι「そばに座る」は、新約聖書の中で唯一ルカがここだけ、マリアにあてて使っているもので、七十人訳聖書にも出てこない例外的な動詞である[48]。「悪霊を追い出されたゲラサの男性」（8:35）も「イエスの足元に座る」のであるが、「足元に」の前置詞「元に」は「そば」παρα であり、動詞「座る」は一般的な κάθημαι である。

8:35　彼がイエスの足元に　〜　座っている（分詞）のを見て、
10:39　彼女は　その足元のそばに座っていて（分詞）
8:35　καὶ εὗρον <u>καθήμενον</u> 〜 <u>παρὰ τοὺς πόδας</u> τοῦ Ἰησοῦ
10:39　καὶ <u>παρακαθεσθεῖσα</u> <u>πρὸς τοὺς πόδας</u> τοῦ κυρίου、

47 その他、παρα なしの「座る」καθέζομαι（7 回）、「一緒に座っている」συγκάθημαι（2 回）、「一緒に座らせる」συγκαθίζω（2 回）等がある。

48 但し、ヨセフス『古代誌』には同語が用いられている。「彼の息子ヨナタンがその右に座り」“παρακαθεσθέντων”ヨセフス『古代誌』6:235.「しかし、そのそばで横になり」“παρακαθεζόμενος”同 8:241. 参照。

動詞「そばに座る」παρακαθέζομαι は、二つの接頭前置詞 παρα、κατα と動詞 ἕζομαι からなる複合動詞である。前置詞 παρα「そばに」を付加することによって、より近くに座るという近親性が表現されている[49]。

（ i ）「足元に」（前置詞 πρὸς+τοὺς πόδας)[50]

前置詞 πρός (元に)＋名詞 πούς(足. pl）の「足元に」は、新約聖書に全部で 7 回出て来る。会堂長ヤイロはイエスの足元にひれ伏し（マコ 5:22. πίπτω）、シリア・フェニキアの女性もイエスの足元にひれ伏し（マコ 7:25. προσ-πίπτω）、悪霊を追い出されたゲラサの男性が正気に返った後、イエスの足元に座る(ルカ 8:35. κάθημαι)、初代教会で、信徒たちは畑を売った代金を使徒たちの足元に置き（使 4:37）、アナニアの妻はペトロの足元に倒れて息絶え(使 5:10)、ヨハネは人の子のような方を見たとき、死人のようにその足元に倒れる（黙 1:17）。

ルカ 10:39 で、マルタの姉妹マリアは、「主の足元のそばに座って彼の言葉を聞いていた」と記されているが、ヨハ 11:32 では、マリアはイエスのいる所に来て、イエスを見るや「その足元にひれ伏し（πίπτω）、主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」と言ったと書かれている。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足を拭った女性であるとヨハネは先に記している（11:2）。

イエスの足元で、彼の言葉を聞くことは 1 回言われているだけであるが、彼の足元にひれ伏すことが 3 回（マコ 5:22,7:25. ヨハ 11:32）述べられていることから考えれば、「足元」の重要性が認識されるというものである。足元にひれ伏す行為は、イエスに向かっての敬愛の能動的所作であるが、耳で聞くことは、イエスからの言葉に集中して、それを受け止めて聞くという受動的でありながらも、注意を働かせて聴くという能動的な行為でもある。

（ ii ）「足元に」（前置詞 παρα+τοὺς πόδας）

「足元に」と翻訳される語には、他に前置詞が πρὸς「元に」ではなく、同義的な παρα「そばに」で書かれている用例が新約聖書の中に 9 回ある[51]。

ルカ福音書に出て来る「足元に」（παρα～）は、すべて 4 回ともイエスの足と関係する。罪深い女性はイエスの足元で泣き（7:38）、悪霊を追い出されたゲラサの男性はイエスの足元に座り込み (8:35. κάθημαι）、会堂長ヤイロは娘が死にかけていたので家に来てくださるようにとイエスの足元にひれ伏し（8:41. πίπτω）、病気を癒してもらったサマリア人は、イエスの足元にひれ伏し、感謝するというものである（17:16. πίπτω）。ここでも 2 回イエスの足元にひれ伏すということが言われている。

---

[49] ヨハ 11:20 では、「マルタは、『イエスが来られる』と聞いて、彼を迎えに行ったが、マリアは家で座っていた（ipf.）」と、παρα なしの「座る」καθέζομαι が使われている。

[50]「足」につく前置詞は他に、κατὰ～、ἐπὶ～、εἰς～などがある。

[51] マタ 15:30. ルカ 7:38. 8:35,41. 17:16. 使 4:35. 5:2. 7:58. 22:3.

マタイ 15:30 では、大勢の群衆がイエスの足元に多くの病人を置いたこと(ῥίπτω)、使徒 4:35 と 5:2 では使徒たちの足元にお金を置いたこと(τίθημι)、使徒 7:58 ではサウロの足元に上着を置いたこと(ἀποτίθημι)が述べられている。

この他、使徒 22:3 では、パウロがガマリエルについて律法の教育を受けたことが「ガマリエルの足元で」と言われている（使 22:3）。

「私は～この町で育ち、ガマリエルの足元で（παρὰ τοὺς πόδας Γαμαλιὴλ）先祖の律法について厳格に教育され（πεπαιδευμένος κατὰ ἀκρίβειαν～）」

ここでの「足元で」は、「弟子である」ことを意味する術語として理解され、パウロがガマリエルの弟子であったということを表現していると捉えられる。

それと同じように、マリアが「主の足元のそばに座って、彼の言葉を聞いていた」というのも、マリアがイエスの弟子であった事を意味するという解釈がある[52]。

たしかに、マタ 26:55 には「～私は毎日、神殿の境内に座って教えていた」（ἐν τῷ ἱερῷ ἐκαθεζόμην διδάσκων）という文言があり、ルカ 2:46 では「イエスが神殿の境内で教師たちの真ん中に座って、彼らに聞いたり質問したりしておられた」と、座ることが教えることと結びつけられている箇所はある。

しかしながら、こうした箇所での「座る」が、師弟関係を意味しているというわけではない。

一方、使 22:3 で言われているのは、明白な師と弟子の関係である。それは、続いて「厳格に教育された」という説明の語句があることからも理解される。

しかし、これ以外の「足元に/で」παρὰ πόδας、或いは πρὸς τοὺς πόδας の用例においては、「教育する/教える」(παιδεύω)などという語句もなく、単に「足元に座る」という語句だけを以て、師弟関係を読み取ることは無理であると思われる。この使徒 22:3 の一例だけを以て、マリアが「彼の足元のそばに座って主の言葉を聞いていた」という箇所を師弟関係に捉えることには疑問を持たざるを得ない。

それは、パウロの場合は前置詞が παρὰ であり、マリアの場合は πρὸς であるという相違によることでもない。使徒 4 章の 35 節と 37 節では、παρὰ τοὺς

---

[52] W.Bauer は”Of listeners and pupils”の例としてルカ 8:35 と 10:39 を挙げている。 *A Greek English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*（Chicago.1979²） p.696.“zealous readiness to learn”K.Weiss,”*πούς*”*TDNT*. Ⅵ.p.630. “Luke in this scene does not hesitate to depict a woman as a disciple sitting at Jesus’ feet; ”.“Her position is that of a listening disciple”. Joseph A.Fitzmyer,*The Gospel According to Luke*, X-XXⅣ(AB28)p.895.　荒井献「第二講 イエス伝承の女性観」『新約聖書の女性観』（岩波書店 1988 年）37 頁。同「第 10 講必要なものはただひとつだけ」『イエス・キリストの言葉』（岩波書店 2009 年）156–157、164–165 頁参照。

πόδας と πρὸς τοὺς πόδας と前置詞は異なるが、両前置詞は同義的に使われているからである[53]。

ただ、παρὰ と πρὸς が同義語的な前置詞であるとしても、ルカ 8:35 での「悪霊を追い出されたゲラサの男性」が正気に返った後、イエスの足元に座っている」というのを、弟子となったと考えるのは前後関係から考えても難しいと思われる[54]。

⑵「傍らに立つ」マルタ

「傍らに立つ」(ἐφίστημι=ἐφ・ίστημι)という動詞は、ほとんどがルカ文書にあって、マタイ、マルコ、ヨハネでは使われていない、いわばルカ好みと言える単語である[55]。この動詞も接頭前置詞 ἐπί「上に/傍らに/そばに」＋動詞 ἵστημι「立つ」の複合動詞であり、「傍らに立つ」「近づく」等の意味を持つ[56]。

ルカでは多くの場合、この動詞の後に動詞「言う」が続くが[57]、マルタの場合もそうである。また、シモンの姑が熱を出して苦しんでいた時、イエスは彼女の「傍らに」立って熱を叱りつけるが、彼女はその後、イエス一同に「奉仕する」。それに対し、「奉仕する」マルタはイエスの「傍らに」立って彼に小言を言うわけであり、両者の「傍らに立つ」の用法は対照的である。

以上見たように、マリアがイエスの「そばに座って」(παρακαθέζομαι) 彼の言葉を「聞く」一方、マルタはイエスの「傍らに立って」(ἐφίστημι)「言う」と、二人の姉妹のイエスに対する接し方の対称性は鮮明である。

「マルタとマリア」のエピソードの中で、マリアは一言も言葉を発さず、マルタ一人がイエスに語りかけるのであるが、彼女はその最初に「主よ」という呼びかけの言葉を発する。この「主よ」の単語が、「マルタとマリア」のエピソードの前半と後半を分ける一語となっている。

---

53 使徒 4:35「彼らは使徒たちの足元に(παρὰ)に置き、その金はそれぞれの必要に応じて分け与えられたからである」。4:37「 持っていた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足元に(πρὸς)置いた」

54 ルカ 8:38,39 には、彼のその後のことが記されている。「ところで、悪霊どもを追い出してもらった男がお供をしたいと願ったが、イエスは次のように言われ、彼を去らせた。39. 『自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたすべてのことを語って聞かせなさい』こうして彼は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことを、ことごとく町中に宣べ伝えた」。こうした記述から、彼が厳密な意味でイエスの「弟子」となったということは考えにくい。

55 全 21 回。ルカ 2:9,38. 4:39. 10:40. 20:1. 21:34. 24:4. 使 4:1. 6:12. 10:17. 11:11. 12:7. 17:5. 22:13,20. 23:11,27. 28:2. 1 テサ 5:3. 2 テモ 4:2,6.

56 同語 ἐφίστημι は口語訳聖書で、以下のように訳されている。「現れる、行く、襲う、おそって来る、立ち合う、立つ、近寄る、着く、臨む、励む、降りしきる、降る」『聖書語句大辞典』(教文館 1959 年)索引 18 頁。

57 ルカ 2:9. 20:1. 24:4.

おわりに

以上が「マルタとマリア」のエピソードの導入文と叙述文を合わせた前半部分であり、これ以下の会話文が後半部分となる。「マルタとマリア」の記事全文の語数は 89 語であるが、前半と後半が相等しく、会話文の最初の語、「主よ」を真ん中にして、前半が 44 語、後半が 44 語と半々に整合的に揃えられている。

また、個々の語句の明白な対比、特殊な語句の選定などから、文よりも理が少しまさった感がしないでもない。しかしそれは、これを読む者に対し、ちょっと立ち止まって理から文の背後にあるものを読み取って欲しいと、「そばに投げかけている」（παραβάλλω）ようにも思われる[58]。

[58] 拙稿「マルタとマリア」を今は亡き山田晶先生に学恩を謝し献呈したいと思います。今から 20 年前、先任校の藤女子大学のキリスト教文化研究所主催の第 1 回講演会（2000 年）に先生をお招きしてお話していただいたのが「マルタとマリア」についてでした。女子学生に対しての講演でしたので、「マルタとマリア」と題して日頃お考えになっておられることをやさしく話されました。その中で「人のそれぞれの役割」ということをおっしゃっておられますが、聖書学の観点から見ても、それは正鵠を得た指摘であることが考察から浮かび上がってきます。講演記録：藤女子大学キリスト教文化研究所 HP.「研究所の紀要」第 2 号（2001 年）。